秋高 同窓会だより

発行者
秋田県立秋田高等学校
同窓会
印刷所
秋田マイクロ写真印刷㈱

機関誌発行を期に 高まる連帯感

八月十六日の定期総会において、任期満了の会長以下三役の再選が満場一致、拍手のうちに決定され、九月十二日の役員会では要望の強かった機関誌を新聞型式で発刊することに決定、本日その創刊号が発行されるにあたり、会長、校長、事務長の次のご挨拶がよせられた。

会長　蓼沼銀治郎（T8）

母校創立百二周年目を迎えて、「同窓会だより」を発行することになった。

昭和四十七年まで出ていた雑誌型式の「同窓会報」「矢留」「同窓会ニュース」「同窓会だより」の流れを受けつぐものとして、会員各位に待望された機関誌である。

同窓会とは、世俗の利害を超えた純粋な敬愛と友情のつどいであろう。「同窓会だより」がわれわれの連帯感を深める共通の広場となることを心から期待するものである。

もちろん、機関誌である以上、「同窓会だより」の内容は、同窓会そのものの活動を如実に反映してゆくにちがいない。回顧趣味に終ることは厳しく戒めなければなるまい。同窓会に毎年新しい若い会員が参加しているのであるから一つの永遠に若い生命共同体として発展してゆくべきものである。

われわれは渾然一体となって切磋琢磨すると共に、百周年の時の盛り上りに劣らぬくらい同窓会活動を充実させて、母校の限りない発展を祈ろうではないか。

「同窓会だより」創刊にあたって、考えていることの一端を述べさせていただいた次第であるが、編集委員の方々のご苦労に感謝すると共に、会員各位のご協力に敬意を表するものである。

「同窓会だより」がいよいよ充実発展して行くように一層のご協力をお願い申しあげて、ごあいさつを終えさせていただく。

学校長　小田島邦夫

去る四月一日付で前校長菊地先生の後任として教育センターから秋高にまいりました。

以来六ケ月間同窓会による歓送迎会、役員会、総会、或いは東京、大阪、能代の支部総会、又同期会等に招待されて、同窓の方々におめにかかりましたが、その度ごとに、秋高の現況や将来について暖かい励ましをいただきました。

そして私も亦先輩校長のあとを引き継ぎ、秋中、秋高一世紀に及ぶ伝統である学業とスポーツ、部活動の両立という厳しい道を通して、諸先輩に続く立派な人間育成に全力を傾けて努力しなければならないと、その職責の重大さをいまさらながらに痛感しております。

今日のように社会が急激に変化する時代は、ともすると人間疎外になり勝で、自己中心的であったり、他者志向が強かったり、いろいろな面で不適応現象が生じることは事実であります。このような時代にこそ、秋高の歴史と伝統のもとに、主体的に自主、自律の精神をもって、学業とスポーツ、部活動の両立をめざして生き抜くたくましい、ゆたかな人間形成が何よりも大切であると思います。

現在学校はいわゆる高台の本当に恵まれた教育環境の中にあります。ここで三年間秋高生として学ぶ生徒は本当に幸であります。しかし校舎施設設備の面では大改善をしなければならない状態にあります。指導上改善すべき点もあります。学校教育上改めなければならないところは改めて、本校の教育を充実し、本校の歴史と伝統にいっそうの輝きを増すようできる限り努力したいと思っております。

同窓、先輩の方々のいっそうのご支援、ご協力をお願いする次第です。

事務長　大規家静（S13）

本年四月縁あって母校に勤務するようになり、その責任の重大さを痛感してる日日であります。

昭和三十六年建設された現校舎は、創立百周年における大補修にもかかわらず、想像以上に傷みがひどく、本年度も二千数百万円をかけて一部補修をしましたが、来年度以降も引続き数千万円の補修を必要としており、このため現校舎移転以来の懸案である各施設改善等、未解決となっているのが現状であります。

しかしながら県財政ひっぱくの折柄、同窓各位の絶大なるご支援がなければ到底早期実現を期待することは不可能と思われます。なにとぞ、母校のより一層の充実と躍進のため今後一層のご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

学校だより

同窓各位から、物心両面にわたり多大のご協力を賜り創立百周年記念事業も完成し、厚くお礼を申しあげます。事業の一環として建設されました研修会館の利用度はまことに高く、各運動部・文化部さらには評議委員会（各学級生徒代表）、各学級による合宿が、年間きれめなく行なわれております。

また、庭園のどうだんつつじや銀杏は今を盛りに、校舎や「心外無教」の記念碑に見事な色彩りを映じており、格技場も従来の不便を解消し、それぞれその機能を果たし、学校生活を円滑にしております。

過ぐる四月、本校発展のため、多大の功績を残こされた前校長菊地俊一氏、同窓会事務局長であった佐々木重光氏が定年退職され、その後任として小田島邦夫校長（前秋田県教育センター所長）、大槻家静事務長（前秋田南高校事務長）を迎えました。

生徒数は一四三三名、教員数七四、事務職員数一二からなる大規模進学校となり、県内の中心校として、地域社会各層の協力もいただき、社会的要請にこたえつつ、自主的な人間形成の場として鋭意教育活動に励んでおります。（本年度PTA会長は辻兵吉（S19）、副会長鎌田貞政、佐野謙一郎（S20）の三氏。）主な学校行事を紹介しますと、五月には、雲隊編成による大運動会、六月には全校合唱コンクール、七月には肉弾相打つ学級対抗、九月には秋高祭・太平登山十一月には二年生の修学旅行と全学年PTA個人面談等、学業との両立を目指しながら、若いエネルギーの爆発と連帯感の育成に事欠きません。

部活動においても、近年めざましい活躍をしてまいり、今年度は中央地区総体で、柔道・剣道・バスケットボール・水泳が二位、弓道・ラグビー・サッカー・硬庭・卓球が二位となり、全県総体では柔道・剣道・弓道が一位、バスケットボール・ラグビー・硬庭・卓球が二位という好成績をあげ、東北大会・全国総体・東北総体・国体に個人や団体として多数出場しまたご協力をえて再建成ったボート部、陸上の槍投、水泳等が活躍しました。伝統の硬式野球部は春季市内リーグで優勝し、その後の各大会でも善戦健斗しましたが今一歩のところで惜敗し、捲土重来を期しております。文化部からはブラスバンド部が東北大会で二位となるなど各部の活躍がめだちます。

一方、昭和四十九年度大学進学の概況を紹介しますと、国・公立大学合格数は現役一三七、OB九十八、計二三五となり、私立大学合格数は現役二一一、OB二七四計四八五となり、主な国・公立大学別合格数は秋大六四、東北大四一、北大二一、新潟大一六などであり、私立大の主なるものは、早大五五、中央大四三、明治大三八、慶応義塾大三七、法政大三一、日大三〇、東京理科大二九、立教大・立命館大十一となっています。これらの大学のほか、北から南へと日本列島くまなく、適性と将来の進路を活かして進学しています。

同窓各位の実社会でのご活躍に刺戟を受け、無言の教えを体し、四百五十有余名の三年生は、三月初旬の卒業式後に、同窓会入会式を経て、若さ溢れる新会員となる日を間近に、目下、ひとりひとりが自己の進路に向って学習の総整理に最後の、そして懸命の努力をいたしております。

今後ともご支援、ご協力を賜わり、秋高のとこしえの発展を念願しております。

学校林の現状

学校林は昭和四年、南秋田郡旭川村長との分権契約により設定され、生徒の手により数年にわたり植栽手入れをされたもので、藤倉部落と仁別部落との中間に位し、今日では極めて至便のところに在るも、当時は藤倉、仁別間は通路として僅かに秋田営林署の森林軌道による外なく極めて苦難の上出来上ったものである。その後旭川村が秋田市に合併され現在は秋田市市有地となっている。（所在）秋田市仁別字薬畑台一〇二の四、（面積）三町歩＝実測＝（分収率）学校70%、市30%、（現在の林令）平均四十年（立木材積）推定一、五〇〇石＝杉＝（今日までの伐採の状況）創立九十周年記念行事等の経費を捻出するための局部皆伐、全区域の間伐、東北電力送電保整備のための支障木伐　等で数回にわたり収益をあげた。局部皆伐跡地に対しては百周年記念最後の行事として昭和四十九年五月、同窓会母志の協力を得て六反歩に杉苗木一、八〇〇本の植栽を行った。

ところが本年五月二日、半月近い干天のあと山菜とりの失火により前年造林地六反歩の全焼のほか、隣接地の古い林に延焼、直径六cmから三十二cmの良木一八〇本が枯死してしまった。幸い外皮と枝葉を焼いたのみで特に支障がないので今秋中伐採、丸太として販売すべく目下進行中である。以上の経過により翠々たる林相を呈しているが地上権設定は五十年間で昭和五十四年には解けるので更に延長の必要あり、秋田市長と折衝の上、その実現を期待するもので同窓各位のご協力をお願いいたします。

（佐藤貞之助（T12）記）

※恩※師※ご※健※在※

▼佐藤六蔵先生

先生は明治20年12月7日のお生れだから、なんと満八十八歳。本校明治41年ご卒業。百周年の時に六十年勤続の表彰を受けられ、その後も母校事務室に同窓会の職員として籍をおかれておりますのでまさに勤続六十二年ということになり、校宝的存在と申しあげても過言ではないでしょう。まことにありがたく、うれしいことです。

現在、先生は鷹匠町（現千秋中島町五の五四）の自宅で悠々自適の毎日を送っておられます。

お体の方も、さすがに若い時に鍛えられたからでしょうか、どこも別にどうといったことなく、体重も昔と変りないとのことです。ただ、フットワークが思うようにならなくなったとのことですが、このお年では普通なら当り前のことでしょう。そうおっしゃるところがやはり若さであり、意気さかんな証拠ではないかと思ったことでした。

好物のお酒のほうは、ほとんど召し上がらなくなったのは寂しいことですが、今までにもタップリ一生の分はお飲みになったことでしょう。お酒の代りに食べるほうは旺盛だそうですからタイしたものです。

日中、お天気がよければ、近所の旭川のほとりまで散歩に出かけられますが、そういう折に、卒業生の皆さんから声をかけられ、しばし立ち話でもできるのが、一番懐かしくうれしいと元気に語っておられました。

▼岸本達三先生

今年八十四才の先生はとてもお元気です。

お住いは、昔からの楢山堰端のお家の後に、長女寿々子さんの夫君斎藤忠海さん（県立農業短大事務局長）方の棟つづきにおられます。（秋田市南通築地十一―三〇）

先生は毎朝附付を三十分ほど散歩されてからお食事で、好き嫌いなくなんでも良く召しあがるとのこと。その後は、読書三昧、特にお若いころからご熱心だったシェクスピアの原書でお読みになるほか、英文学に関する研究論文等だそうです。お伺いしました時、「ハムレット」を拝見致しましたが、その本には朱線があちこちに引かれ、欄外にビッシリ英語でメモされておりました。夕方四時ころになりますと、約一時間位、楢山から金照寺山方面を散歩されるというご日課で、午後九時ころお休みとのことです。

おいくつになっても読書とご研究に没頭され、しかも毎日、朝、夕のご散歩を欠かさないことが、ご健康の秘訣と思いました。

今の若い人にひとことお願いいたしましたら、「今の若い者のことは良く判らないが、良い本を読む習慣をつけることが大切だと思う。本を読む人が少なくなったし、自分の頭で物を考えていないのではないか」というようなことをいわれましたが、私のような怠け者は、襟を正して先生のお話しと、ご生活を学ばねばと思いました。

（吉井忠亮（S13）記）

▼伊達義行先生

先生は明治33年1月15日のお生れで、本校大正7年卒。七十四歳になられる。

先生には随想の原稿をお願いしたところ、〆切り当日、先生はわざわざ学校の事務室まで原稿を持ってきてくださった。

最近、眼が悪くなり、原稿がなかなかはかどらないので遅くなったとのこと、全く恐縮の至りでした。

しかし、お元気でご趣味は庭いじり、特に芍薬をたくさん育てておられるとうかがいました。

毎日、夕方には、北林道場に出られて、柔道着をつけて、二時間後進の指導に当たっておられるとのことでした。柔道は三度の飯と同じようなものでやめるわけにはいかないと楽しそうに微笑される先生でした。先生の随想は六面に掲載させていただきました。

天上天下

「天上天下」と書くと、すぐに「唯我独尊」を連想されて、「なるほど、秋高同窓会の機関誌だからなア」とカングられる心配もないではないが、あえてこのコラムの名称に取り上げるについては少しばかりのワケがある。秋高の教職員の中に同窓生がいる。そこで自然に同窓会母校支部とでも言うべき会が生まれたのはよほど前のことであった。そのうちに会に何かいい名前をつけたいということになったのである。募集した名前をしぼり、投票によって決めたのは「天上会」であった。もちろん、校歌「天上はるかに……」からとったものである。この「天上」はおおらかで悪くないようである。良寛の有名な書に「天上大風」というのがあるが、手形の台地にある学校の会としてはふさわしいとも言えそうである。◎さて、コラムの名称を考えるとき、頭に浮かんだのは朝日の「天声人語」であった。やっぱり対句表現のほうがおさまりがいいようである。そこでとりあえず「天上天下」とつけてみたのである。テンジョウテンカとも読めるが、古典的にはテンジョウテンゲであろう。そうすると、ユイガドクソンと続いてしまうのである。しかし、唯我独尊は決して独善ではあるまい。みにくい思い上がりでもあるまい。主体性の確立であり、人格の尊厳の宣言なのであろう。ともかく、続くことばはあえて言わず、ただ「天上天下」だけなのだから、「天地の間」とか「宇宙の間」という意味で、まさに気宇壮大、とらえどころがないくらいスケールの大きな名称ということになる、と自賛しておくことにしよう。◎秋高同窓会員が天上天下にあまねく分散してそれぞれ活躍していることを思うと心強い限りである。この「同窓会だより」が組織の末端にまで行きわたって、同志の連帯のきづなとなると共に、切磋琢磨の場となって、ますます充実しつつ前進することを切に願うものである。

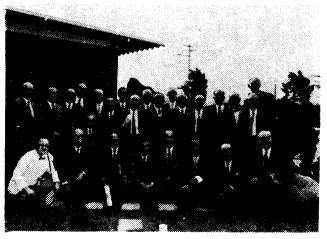
つどい

癸亥会

昭和四八年九月一日、母校百周年記念の日、わが癸亥会は卒業五十周年記念同級会をホテル山王で開いた。出席者二六名。東京から三人、大阪、網走、仙台、一人ずつ、県内四名、その他は市内であった。

わがクラスは卒業一一八名で、うち死亡五二名、現存六五名である。わが会を癸亥会と名付けてくれたのは故古村先生で、大正十二年は「みづのとゐ」の年であったからだ。

癸亥会と別に秋田市在住者のみで三和会という無尽会がある。昭和二六年から始め、四四年から宿泊の例会を開き、今年十月十、十一日は阿仁の湯ノ沢温泉太平湖、南沢鯉茶屋であった。お湯に浸りっぱい傾けると格別の情趣が湧くものである。



同級会には隠し芸のうまいご仁がどこにも居るものだ。わがクラスの第一人者は何といっても藤田溪山君である。たくさんの民謡をしりとり式に歌いまくる芸は彼でなければできない。その他、秀逸（？）な落語、藤村有弘バリのフランス語の演説などなど、ゆくとして可ならざるなしである。

大曲のドクター鈴木八郎治君は根っからの芸好き、日本舞踊は堂に入ったもので正にプロ級であろう。中学の寄宿舎で、ウイリアム、エスパートの二丁拳銃に構え、西部の勇者に扮した写真は癸亥誌に載せてある。

石井乃武夫君も芸達者で何でもやったが、今は宝生流の県の会長で師範格であり、昨年家元から表彰された。同級会では優雅な仕舞を披露してくれる。

剣豪佐宗金太郎君の頬かむりしての「雨降りお月さん」や「テルテル坊主」の童謡お遊戯は憂嬌もものだ。

その他、各人皆得意の歌コの一つや二つは持っているが、最近はあまり余興も出なくなった。

同級会の総くくりはやはり寺井和志蔵君作詞の「癸亥会呑み歌」であろう。これはドンパン節の節で歌われる。

癸亥会

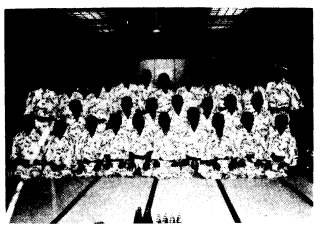
一、秋中出てから五十年
　昔紅顔美少年も
　かれこれ七十の歳となり
　白髪ヤカンの同級生
（以下省略）
（佐藤達三郎記）

秋田中学卒業50周年記念同級会誌

大正十三年同級会

秋中十三年会は毎年秋田と東京で開かれており、卒業年次の古い割にはいつも参加者が多い。今年の秋田での同級会は、六選を果たした小畑知事の招きで七月十九日一時に集合、特別仕立てのバスで出発した。

県スケート場、野球場、向浜工場を見る。秋中在学中には声が生



え入影もなかった向浜も今は立派な公園、工場地帯に変っている。次は新しい県立博物館を見学、更に重要文化財に指定された同級生の奈良君の古い豪壮な邸宅を見て船川、加茂を経て戸賀のホテル帝水に夕方到着、夕陽の海を眺めながら大広間で懇親会を開く。

幹事内藤君のあいさつの後、はるばる大阪から参加した神田君が同級生を代表して小畑君に記念品を贈呈した。民謡日本一の美声を聞いて五十年前のよき秋中時代の昔にかえり、夜を徹して語りあかした。

翌朝は県立水族館を見て、八望台寒風山展望台に登り男鹿半島の雄大な風景を見て、更に大潟村に行き村長からモデル農村の実状を聞いて昼食、午後三時秋田駅でお互いの健康を祈って散会した。

出席者は二十九名。

（県外）阿曾村千春、大島金作、笠井重光、神田孝一、杉本長三郎、見須二郎、高橋平八郎、吉成一郎。

（県内）池田重健、金田正身、小泉五郎、小西松治郎、佐々木仁智郎、柴田久助、筑波義教、出原直助、山本九郎。

（市内）石川羊太郎、越中屋誠一、小畑勇三郎、大島昌一郎、大野博通、加賀谷東七郎、田中安太郎、田代俊男、内藤庸男、奈良晋蔵、花岡省造、宮田正彦

（大野博通記）

昭和十九年同期会

昭和十九年卒業の三十周年記念同期会が昨四十九年八月二十五日六十八名の同期生と、恩師佐々木正之先生、それに当時手形校舎近くに店を開いていた矢荻文具店矢荻のアンサンの奥さんが特別参加された。午後一時折からの炎天のもと一同浄願寺（期友菊地君の寺）に集い、三十名の今は亡き友と、恩師岡田良吉先生の慰霊祭を行ない、引き続き場所を新装成った「平安閣」に移し、記念撮影ののち、充は新幹事会に一任となる。花田新支部長は挨拶の中で、百年の歴史を持つ秋田高校としては同窓会に集る人が少ない。自分の在任中同窓会の集りに参加する人を多くするよう努力したいと述べられた。

蓼沼本部会長は母校百周年記念祭に対する支部の協力に謝意を述べた。小田島新校長は進学とスポーツの両立のために今後努力するとその抱負を述べた。

富永前支部長乾杯、大槻母校事務長、本部小西達四郎理事の挨拶を終り各自近くの年次の人達で机を囲み一時間半酒杯をかたむけて久し振りに歓談に入り楽しいひと時を送った。

出席者

本部　会長　蓼沼銀治郎　大8
　　理事　小西達四郎　大12
　　校長　小田島邦夫
母校　事務長　大槻家静　昭13
　　担当者　植村久美　昭37

支部会員

大6　富永哲夫、大9　花田緑朗、土井栄治、黒羽三知男、平山寅次郎、大10　原田道夫、茂又弘二、大11　田村忠、大12　佐宗金太郎、大13　高橋平八郎、杉本長三郎、笠井重光、大14　伊藤勝二、大15　宇佐見盛志、加賀谷篤二郎、金谷勇、昭2　進藤鉄太郎、木村元治、昭6　大山正、進藤末治、昭7　戸田百年、昭9　柳原昌一、昭11　本郷俊長、桜庭庄太郎、昭14　石橋武雄、大川政義、昭21　星野恒雄、雨宮芳男、昭27　柴竹真弘、宇佐見良司、昭29　佐藤信久、昭30　加藤功、昭32　山田祐也、
（以上39名）

昭和二十年同期会

昭和二十年、学徒動員のため川崎市東芝工場で卒業式を行なって

式典を挙行した。担任諸先生への記念品の贈呈、辻会長の挨拶で開宴、遠く東京からも白根、鈴木（弘）、関、藤田、小松の諸兄もかけつけ、会を一層多彩なものとされた。校歌、応援歌の大合唱で尽きぬ宴を閉じた次第。

（池田記）

近畿支部設立総会

○時　50・10・17
○所　大阪、くいだおれ

栗谷広氏の開会のことばのあと伊藤糾氏の司会で進行、発起人を代表して後藤政雄氏が「今回、秋高の大阪周辺の同窓生より、わが同窓も会を作ったらとの声があり、すでに支部長さんに、神田さんを予定しているので、本日を発会式とする」との経過報告があって、次のようなことを議決した。

○名称…秋田高校同窓会近畿支部
○組織…支部長のほか発起人が幹事となる。
○総会…年一回定期的に総会を開催し、必要な時は臨時総会を開催する。
○会費…会を開催の都度徴収する
○支部旗をつくる。　○その他。

続いて神田支部長から「だいぶ以前に、支部をつくる話が出て、白石弘毅さん等のお骨折で、そうごうデパートに集り相談した。その際、支部長を引き受けてくれ……とのことで引き受けたが、はじめての事でもあり何も出来なかったが、発起人の幹事さんが全部決めてくれた。本日は、小雨の中、大勢集って下さり、又、遠路、本部より大嶋副会長さん、母校より校長の小田島さん、事務局の植村さんの出席を得て、盛大な設立総会になった事を喜んでいる。

母校のスポーツがますます隆盛し大阪に来て下さることを期待し、待っている。」とのあいさつがあった。次に小田島校長より母校の近況を中心にあいさつがあり、大嶋副会長より、ラグビー、野球遠征のお礼、百周年の協力に対してのお礼、「同窓会だより」発刊のこと等についてのあいさつがあり、記念撮影。視電披露ののち、石黒次郎氏のカンパイで懇親会となり、大阪の道頓堀の宵の一ときを送った。

出席者

来賓、大嶋民治、小田島邦夫、植村久美、小山高支。

会員、神田孝一、宮越竜一、宇佐美一雄、高田寿、泉義一、桜庭功三、宮越精三郎、稲川直晴、中山茂、石田伸雄、白石弘毅、渡辺良宏、阿部忠雄、相沢重正、石黒次郎、本間良吉、野内忠雄、武田汎、小森恭次郎、島田嘉勝、佐藤恭三、田中清吉、三浦四郎、後藤政雄、佐藤四郎、栗谷広、田中久治郎、伊藤糾、赤川良之助、北条晃、高田義一、佐藤文美、伊藤博一、二宮信孝、伊藤洋一、石山元一、田口長兵衛、穂積愿。

東京支部総会

○時　50・6・20
○所　東京、東武百貨店

経過、金谷幹事長司会のもとに一切の議案を審議し決算予算を承認、加賀谷監査から監査報告され、又会則の中に正式に監査二名を規定することに決定、新しく花田緑朗氏（元サッポロビール重役大正九年卒）が支部長に選任、幹事長、幹事は再選（留任）し監査に加賀谷篤二郎（大一五）浦川直樹（昭七）両氏を選任、幹事の補

横手・平鹿支部

○時　50・3・20
○所　横手市、松与会館

最初に柿崎支部長のあいさつがあり、諸報告があったあと、来賓祝辞に入る。まず、蓼沼会長が、母校創立百周年のすべての事業が終了し、支部会員に謝礼を述べた後、菊地校長が、学校の現況を説明し、今後の協力をお願いして懇親会となる。ここで小畑知事よりの祝電が披露され、それぞれ一年振りの支部総会を盛りあげた。

（出席者約35名）

仙台支部総会

○時　49・10・19
○所　仙台市　みやぎ野会館

支部幹事の菅原晃一氏の開会のことばに続き、稲見春夫支部長のあいさつがあり、そのあと会務、会計収支報告があって、満場の拍手をもって承認され、次いで、来賓の本部副会長大嶋さんのあいさつ、菊地校長のあいさつがあり、懇親会となる。各出席者の自己紹介が、なごやかな雰囲気の中で行なわれ、又、ユーモアを交えた話に、一年振りの総会の盛会を祝った。

（出席者約40名）

本荘支部設立総会

○時　49・11・20
○所　本荘市・秋田相互銀行本荘支店

藤丸隆樹氏の司会で開会。斎藤銑四郎氏が設立の経緯報告をし、議長を同じく斎藤氏が務め、議事に入り、まず、会則の審議が行なわれ、原案どおり可決。

次に役員選出になり左の役員が選出された。

会　長　堀　稔（昭10卒）
副会長　内藤　賢一（昭14卒）
〃　小玉　長毅（昭21卒）
幹事長　斎藤銑四郎（昭32卒）

新役員を代表して、副会長の小玉氏があいさつ。毎年定期的に支部の総会を開催し、母校に協力することを決議、議事を終了する。続いて、来賓の本部蓼沼会長のあいさつ、菊地校長のあいさつがあり、大嶋本部副会長のカンパイの音頭で懇親会となり、午後八時、会を閉じる。

（出席者約40名）

大曲・仙北支部

○時　50・3・22
○所　大曲市、対川閣

加藤幹事の司会で開会。鈴木支部長のあいさつのあと、支部経過報告、会員の動静報告、艇庫の募金報告などがあり、次に役員改選で長年支部長を務められた鈴木八郎治氏に代って伊藤恭五郎氏が新支部長に選ばれる。続いて来賓あいさつに移り、大嶋副会長が、同窓会のことについて、菊地校長が母校のことについて、それぞれ近況を述べた。そのあと、伊藤支部長があいさつ、会を終了。

引き続き懇親会に入り、種々懇談する。特に支部会員から「現在の高校入学の学区制について」の要望等があり、盛会であった。

（出席者約40名）

能代・山本支部

○時　50・9・20
○所　能代市、宮茂登

会次第により次のように会が進んだ。

○開会のことば　斎藤一雄
○支部長あいさつ　松野朝造
○来賓あいさつ　大嶋副会長
　小田島校長

このあと議事に入り、①経過報告、②役員改選、③特に事業がなかったことの報告、④会員の動静があり亡くなられた会員の、めい福を祈って黙禱をした。

校歌斉唱ののち、続いて懇親会に移り、懇談の中で、当支部では、毎月一回定例の昼食会（矢留昼食会）を開催しており、今月で100回目を迎えたとのユニークな会の話も出た。最後に自己紹介等があって閉会した。

（出席者約40名）

湯沢・雄勝支部

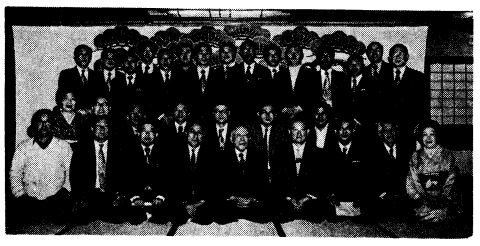
○時　50・11・6
○所　湯沢市、石川

開会のあいさつ、奥山支部長あいさつのあと、同窓会本部蓼沼会長のあいさつ、梶原先生が学校の現況について報告したあと懇親会に移り、記念撮影をし、盛会裡に閉会した。

出席者

来賓、蓼沼銀治郎、梶原忠郎、桝田浩司。

会員、田村道有、金沢一郎、奥山信吾、藤原吉郎、斎藤義輔、阿部英二、木村賢一、斎藤貞四郎、松下祐一、阿部良一郎、佐藤進、国井治久、荘司徹、柿崎道直、吉川鉄也、渡部匡、阿部行夫、木元一俊、加藤輝一、吉田雅宏、綱木俊夫、柴田浩司、三浦滋、城好正、斎藤永吉、佐々木勝憲。



秋田県庁支部

○時　49・12・3
○所　秋田市、アキタニューグランドホテル

はじめに菅生正雄支部長のあいさつがあり、今期で支部長を辞任する旨の話があり、次に議事に入り、左記事項について、それぞれ承認、議決される。

○昭和48年度決算について
○野球部甲子園出場賛助金の収納状況について
○昭和49年度予算案について
○ボート部義援金の収納について

最後に新役員が選出され、支部長に小貫顕氏、副支部長に菅原繁雄氏、堀井秀弥の各氏が選出された。続いて懇親会に移り、小貫新支部長のあいさつのあと、名誉顧問の小畑知事のあいさつがあり、カンパイ。そのあと蓼沼会長と菊地校長のテーブルスピーチがあって、懇談。校歌、校友会歌の斉唱、万歳三唱をとなえて閉会となった。

（出席者約120名）

秋田市役所

○時　50・1・10
○所　秋田市、産業会館　伯養軒

開会のことばのあと、中田富重会長のあいさつがあったあと、議事に入り、昭和49年度収支決算報告が承認され、新支部長に中田氏が再選された。続いて特別会員の紹介などあり、懇親会に移り、蓼沼会長、菊地校長のあいさつがあり、高田市長が特別来賓としてあいさつされた。

新年早々の会で、何となく華やいだ雰囲気の中で盛会裡に終了した。

（出席者約100名）

秋高天上会

○時　50・5・14
○所　秋田市、鎌田会館別館

この会は、秋高職員の会員で構成されている会で、特に会長などの役員を置かず、卒業年次順に当番幹事を決め、年に一～二回程度の「会」を開催している。

今回は、菊地前校長、小田島校長も出席され、また同窓会から蓼沼会長、大嶋副会長を招き、新会員の紹介などあって、小雨降る日だったが、約二時間余り、和気あいあいのうち、なごやかに終了、今後の母校秋高の発展の為努力することを誓った。（出席者約30名）

◎お願い……編集委員会

地区・年次で「つどい」を持たれたときは、次の要領で必ずお知らせください。

○会の名称○日時○場所
○状況○出席者（数あるいは氏名）○できれば写真。

編集上の都合による部分的カットはご海容ください。

祝　創　刊　号

秋田食糧卸販売㈱
㈱蓼沼商店
東和産業㈱
取締役社長
蓼沼銀治郎　T8卒

株式会社 三伝商事
取締役社長
三浦伝六　S8卒

株式会社 大嶋商会
取締役社長
大嶋民治　S8卒

アキタニューグランドホテル
阿部武次　S6卒
伊藤博次　S12卒
山田宗一　S16卒
森川良治　S30卒
佐藤忠明　S33卒

県会議員
植田正夫　S19卒

秋田トヨタ自動車株式会社
村上十郎　S19卒

秋田トヨペット㈱
取締役社長
蓼沼陸郎　S20卒

株式会社 和賀商店
和賀雅彦　S34卒

大民施設工業株式会社
取締役　大島駿一　S37卒

総合建設業
株式会社 栗原組
取締役専務　渡辺景友　S8卒

秋田小松株式会社
志田栄一　S19卒

秋田いすず自動車株式会社
辻兵吉　S19卒

割烹 あきたくらぶ
伊藤民雄　S35卒

黄金井酒造㈱
代表取締役
高橋清一　S20卒

株式会社 村越時計店
村越貞夫　S30卒

ショッピングセンター
秋田プラザ
政府登録国際観光ホテル
秋田第一ホテル
秋田ビル株式会社

特殊電池工事、整流機器
カークーラー、カーステレオ
カセット、タキシメーター
タコグラフ
佐々木電池工業㈱
代表取締役
佐々木茂雄　S12卒

秋田酒類製造株式会社
橋本英鉄　S19卒

日本鉱業船川製油所
船木正男　S19卒

黄金属宝石
㈱竹谷本店
田口昭二郎　S20卒
竹谷徹三郎　S26卒

北日本コンピューターサービス㈱
取締役社長
江畑基一　S25卒

日本海建設株式会社
土木、建築、産業設備機器
各種プラント、電気、計装
代表取締役
京野大三　S12卒
取締役
小野崎三男　S15卒

株式会社 那波商店
専務取締役
那波三郎右衛門　S12卒

AACスポーツの殿堂
秋田アスレティッククラブ
取締役社長
高橋政奏　S11卒
常務取締役
鳴海英作　S19卒

堀井ビル
堀井逸郎　S19卒

川口医院
川口新助　S19卒

旅館 美松
籾山政紀　S20卒

三伸開発株式会社
常務取締役
小畑悟　S34卒

三陽電機株式会社
代表取締役
櫻田正吉　S5卒

株式会社 東北機械製作所
鉄構、橋梁
各種プラント、鋳鋼
取締役社長
松本修二　S6卒

不動産・商事
東北興産株式会社
取締役社長
高橋政泰　S11卒
取締役
小縄太郎　S12卒

佐藤歯科医院
佐藤俊男　S19卒

佐藤医院
佐藤頼雄　S19卒

㈱辻兵
取締役社長
辻兵吉　S19卒
専務取締役
辻良二　S26卒

本金
本間和雄　S26卒
進展実業
正雄　S31卒
中京大学
幸雄　S34卒

秋田電機建設株式会社
取締役社長
近藤英夫　S6卒

小澤歯科
小澤雄象　S12卒

中村歯科
中村正　S17卒

石田歯科
石田達也　S22卒

渡部歯科
渡部光太郎　S22卒

笹原内科医院
笹原秀雄　S23卒

白根病院
白根雄二　S18卒

湊小児科医院
湊貞造　S20卒

チバ歯科
千葉昭八郎　S27卒

三浦歯科
三浦捷也　S35卒

秋田オフセット印刷
専務取締役　柳原良秋　S37卒

千秋薬品株式会社
代表取締役社長
青山忍　S16卒

石田内科医院
石田秀一　S13卒

小林内科医院
小林尚壬　S28卒

沓沢医院
沓沢貫之　S15卒

たかはし歯科
高橋是崇　S31卒

佐野薬品株式会社
取締役社長
佐野謙一郎　S20卒

酒蔵 高清水
野口伸治　S27卒

和光薬品株式会社
取締役社長
高橋鎌治郎　T15卒

祝　創　刊　号

株式会社 石川酒店
石川健一
S17卒

美酒　創業元禄
福禄寿
渡辺誠之助 S20卒
渡辺兵衛 S41卒

東海林工業株式会社
東海林広司 S17卒

清酒 秋田山 醸造元
株式会社 菊地酒造店
菊地鶴松
S14卒

醸造元
高清水
発売元　秋田酒販㈱

宮崎印刷株式会社
代表取締役社長
宮崎金一
S13卒

清酒 秋田晴
川口和夫 S23卒
金野稔彦 S34卒

純金入清酒 黄金井
高橋清一 S21卒
高橋昌一 S21卒

資合会社 酒の石川屋
代表社員
石川清治 S36卒

株式会社 英雄分店
冨野巳代治 S7卒
冨野和夫 S34卒

株式会社 平惣商店
代表取締役
平沢幸作
S17卒

宝石・時計・メガネ
ナベシマ
鍋島喜隆
S37卒

秋田ドラム工業株式会社
代表取締役社長
銭谷象二郎
S14卒

レディスショップ
すとう
須藤二郎
S26卒

秋元医院
医学博士
秋元辰二
S17卒

合資会社 さくらんぼ
代表社員
本庄谷吉治
S14卒

ホテル大和
佐渡谷栄悦
S35卒

総合結婚式場
土崎神明社斎館
伊藤幸枝
S8卒

須磨歯科医院
院長
須磨治郎
T11卒

㈱山下金物店
専務取締役
山下泰司
S27卒

五十嵐病院
院長
五十嵐博
S15卒

㈱舛屋薬局
専務取締役
加藤義夫
S31卒

はせがわ
代表取締役社長
長谷川正博
S36卒

土崎信用金庫
理事長
加藤健次
S20卒

金子物産㈲
代表取締役社長
金子恭三
T12卒

㈲ヤマキウ商店
小玉孝次郎
T7卒

㈱那波伊四郎商店
那波伊四郎
S2卒

㈱本金
小玉得太郎
S18卒

小玉合名会社
小玉順一郎
S20卒

秋田共立病院
小泉春雄
S26卒

㈱第一会館
信太勝
S16卒

㈲ヤマキウ商店
小玉康延
S31卒

奈良工務店
建協生コン
奈良力男
S31卒

㈱勝月
片谷信一
S31卒

㈱河周
岸部章一
S31卒

建築構造コンサルタント
山脇健
S32卒

鎌田会館
鎌田寿
S42卒

株式会社
文京堂
三戸俊信
S42卒

燃料・建設資材
株式会社 山二
西村紀一郎
S34年

菓子食品卸
本山商事
専務取締役
本山秀昭
S36卒

●総合スポーツ用品
竹半スポーツ
竹屋直太郎
S42卒

陶器・ガラス器
引物・贈答品・記念品
陶苑 むらや
村木勲
S36卒

平野井ハウス㈱
平野井昌弘
S36卒

秋田山王テニス倶楽部
代表取締役
高井善憲
S38卒

ツキタ電気
継田達蔵
S40卒

株式会社 秋田コクヨ
岸部恵一
S30卒

合資会社 一力
堀井軍平
S34卒

工藤木材株式会社
工藤茂丸
S42卒

株式会社 三浦書店
取締役社長
三浦敬一
S10卒

株式会社 加賀谷書店
取締役社長
加賀谷豊治
S16卒

株式会社 三光堂書店
取締役社長
渡辺栄一
S20卒

山内歯科
山内静
S27卒

三浦印刷
三浦祥助
S27卒

サ Q ン Q キュー Q 社
保坂二男 S27卒

秋田マイクロ写真印刷㈱
辻悌五郎 S27卒

来年こそガンバルぞ!!

秋高運動部

十一月十日、八橋球技場のドロンコの中で行なわれた第五十五回全国高校ラグビー大会県予選の決勝、対秋工戦は、凄絶な泥人形の激闘であった。前半好調で6－4で大いに期待されたが、後半利あらず逆転、20点取られて秋工の優勝を許した。かくてなお数種目の新人戦を控えてはいるが、大体においてスポーツのシーズンは終えたと言ってもいいであろう。今までのところ、各部共に全力を傾注して精進を続けてきて、それ相当の業績を、市内、中央地区、全県の段階では挙げている。しかし、東北、全国の段階となると、出場し健闘はするが、残念ながらなかなか制覇するまでには行かなかった。鍛練の場としては百周年記念事業の格技場もできたし、焼けた艇庫もりっぱに再建され、満を持して捲土重来をはかる条件は完備しているのだから、全国制覇を目ざして大いにガンバッテもらいたいものである。各部の声を収録してみよう。

泥の海の激闘

ラグビー部

部長　伊東俊穂（S26）

全国大会出場四回という伝統をもつ我がラグビー部は、四回目の出場をはたしてから、三年のブランクを経ているので、今年こそは絶好のチャンスとばかり執念を燃やしてがんばりましたが、運命の女神に見はなされ、大方の期待にそえず慚愧にたえません。

ラグビー競技のもつ同窓諸兄のイメージともいうべきものはいかなるものでありましょうか、秋高百年の歴史の中で各時代の先輩によりそれぞれ異ったものではありましょうが、昨今、ラグビーはそのピーデーで縦横無尽な変化にとんだ面白さがファンを魅了し、人気スポーツの一つたらしめているようです。それだけに体力を要し、技術の習得のための厳しい訓練が必要であり、ましてやラグビー王国秋田であるから、勝つためには苛酷なまでの練習が要求されるのである。

が然し、本校ラグビー部の場合には連日、一時間半の練習で通してきている。

「連日3～4時間の連習をしている学校に一時間そこそこの練習で勝てる筈がない」という世間的常識にあえて挑戦してその成果を問うているのは、その意味で、昨今の高校スポーツのあり方への問題提起ともいえるのではないでしょうか。

高邁な理論はどうあれ、部員たちは、一時間半、懸命に楕円形のボールを追って肉体をぶっつけ合い、走りまくり、泥だらけ、すり傷だらけの身体をあらって家路につく。秋高ラグビーの部員はエリート選手でも、特別なスター選手も目指してはいない。まともに授業をうけ、大学合格をめざしている平凡な高校生である。家では黙々と各自の目的にむかって学習にはげむはずである。

彼等はフィフテーンの一員として、疲れ、苦しみ、悩みながらもはげまし合って努力している。この友情が明日の彼等の大きな支えになることを彼等自身は知るまい。

然しそれでよい。これが真執な高校生の現実だと思う。こんな中から是非全国大会出場を果たしたい。

今年の活躍や努力が土台になって、新人戦では優勝しているので来年は更に期待したい。そして、「秋高ペース」の練習の中から彼等は必ずや期待に答えてくれることを信じたい。

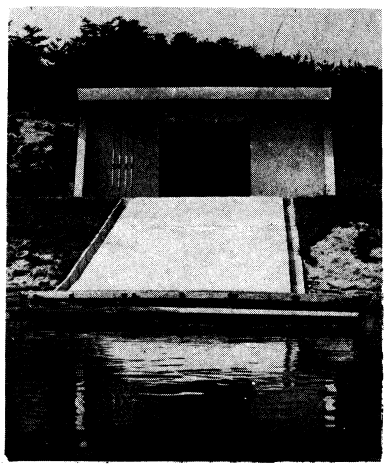
最後に、同窓諸兄の変らぬ、暖かいご後援を感謝しておれのことばとします。

剣道部

秋高創立百周年に建てられた全国一の剣道場で毎日肉体的に精神的に技術的に鍛えられている。その結果として総体で団体戦及び個人戦で優勝し、インターハイに出場準々決勝まで進出した。県体では団体準優勝、東北大会で準優勝、魁旗争奪高校勝抜大会で優勝という立派な成績を残しているが、めざすは全国制覇である。来年はレギュラーのうち二人が残り又有望選手が多く全国制覇をめざして部員は頑張っているので大いに期待できるようである。

柔道部

総体で団体優勝、重量級個人戦で優勝、軽量級で準優勝してインターハイに出場したが決勝トーナメント一回戦で習志野高校に破れた。しかし、大会優秀校に選ばれている。県体では団体で優勝、個人重量級で優勝、中量級で準優勝東北大会では優勝を逸したが技術優秀校として表彰された。団体にも個人で出場する等活躍している新人戦でも一、二年に優秀な人材が多く来年の活躍が期待されている。



新しい艇庫

ボート部

向浜に新しく艇庫が建てられ、部員も気分一新、張りきって今は体力づくりに励み、春を待ち全国大会での活躍を期し努力している。

硬式野球部

昭和四十八年（秋高創立百周年）の第五十五回甲子園大会に出場したが、その後武運つたなく今年も夢は破れた。しかし部員は伝統ある野球部にはじないように連日一球を追い、猛練習の中に、体・心・技を錬磨し通算十五回目の甲子園大会出場をめざして精進努力をしている。

選手から見た部の現況

バスケット部

ボール一つに全精神力を傾け勝負に対するどん欲なまでの執念、そして根性。ボール一つに全ての情熱を燃やし、悩み、それがわれらの青春のすべて。そんな秋高バスケット部の伝統。

その伝統が、あまり見られないと指摘される現在のバスケット部。しかし、振り返ってみると、中央地区新人戦で、決勝戦において惜敗したが、のち全県新人戦にて代表となり、東北大会出場。全国大会出場をかけた一戦においては敗れたものの、中央地区優勝、六月の総体では決勝進出。再び東北大会出場。そして、県体では、初優勝というすばらしい栄冠を勝ち得たのである。

その輝かしい伝統の一ページを残した三年生が、部活動から離れ、〝新生〟秋高バスケット部が産声をあげた今。人格形成、そしてもちろん全国大会出場を目ざして、連日「短時間で集中的に、自己錬磨」を目標に、きびしく練習にとりくんでいる。練習では、伝統である強固な精神力、どん欲な執念、根性、それらすべてが部員に宿らなければならない。それなくしては、全国大会出場も達成されるはずもなく自己形成もでき得ないと考える。今、新人戦を目前にひかえて、部員一同、目標を達成すべく連日、汗を流している。それが、青春の貴重な一ページとなり、また、秋高バスケット部の伝統を引き継ぐものと固く信ずるものである。（新主将　二年　瀬戸泰之）

弓道部

忘れもしない6月15日。その日秋田市立高校弓道場で全県総体が行なわれ、秋高男子が団体優勝（五年ぶり三度目の優勝）したことは確かなことなのです。そして、優勝すれば油断してインターハイで負けるから準優勝くらいに甘んじておこうと言って臨んだ東北大会は、みじめな敗北に終わり、弓道部員は一丸となってインターハイに向かって突撃したのです。

インターハイでは、連日約36℃くらいまでぐんぐん上昇する温度計を横目でちらちら眺めながら、僕らは「優勝」の二文字を手中に収めるべく、必死になって試合をしたのですけど、見事に予選通過したものの決勝トーナメントで、健闘むなしく敗退し、なかば「全国」のレベルの高さに目を白黒させながら、決勝戦などを眺めていたのです。

その後、夏の県体では、男女共団体優勝という素晴しい成績を収め、新人戦でも善戦し、そして今、すべての弓道部員は、来年の総体インターハイの優勝をめざし、静かに燃えつつある。

（選手兼マネージャ　伊藤　泉記）

校史資料

渡部広成先生のこと

十月十七日の秋田魁新報に、渡部広仲氏が「わが家のむかし」を発表された。文中「広成は……藩学校権少参事、秋田中学校教授を歴任」とあるのに驚喜、さっそく連絡してご教示を願った。

『秋高百年史』P8～P10に渡部広成についての記載があり、「明治五年新ニ学制ノ発布アルヤ本県ハ文部省諭達ノ趣旨ニ由リ旧藩時代ヨリノ諸学校ヲ廃シ翌六年二月始メテ秋田町東根小屋町六十一番地ニ変則小学一校ヲ設置シ、九月一日之ヲ変則英語学校トナシ日新学校ト称ス、是レ本校ノ濫觴ニシテ此時ノ校長ハ渡部広成ナリトス」と吉原一郎編『秋田中学校校史』を引用している。これによると、渡部広成は実質的な本校初代校長ということになるのだが、県庁にも学校にも傍証となる記録がないのである。わずかに、変則小学の教師三名の筆頭に渡辺広業がいて、これが渡部広成と同一人物かと思われるにすぎなかったのである。

明治初年の先生

百年の歴史の中の神話時代の人物としてはるかに思い描くしかなかったのであった。

日ならずして広仲氏来校、つぶさに広成についてうかがうことができた。昨年発行の私家版『義産大和尚』の寄贈をいただいた。その中に広成についての詳細な記述があり、履歴書の写しものっている。学校関係の記載を抄出すると

明治三年六月二日学校権少参事
同年十月二十五日学校幹事
同五年四月二日学校助教授
同年九月四日学校廃止
同六年一月十日学区取締
同年四月七日告病辞職
同十六年三月十日任秋田中学校助教諭
同年四月三十日病を告げ辞す
同十八年十月十二日秋田中学校教授委嘱
同十九年七月告病辞職

となっている。こうして広成は明治二十年一月二十四日、六十三歳で病没したのである。

肝心な明治六年についてはなお疑問が残るのは何ともいたしかたがない。吉原一郎先生は何に基づいて書かれたのであろうか。「此時ノ校長ハ渡部広成ナリ」としないで「ナリトス」としたところに含みがあるのかもしれないのである。

とにかく渡部広成は本校早創期に重大なかかわりのあったことに間違いはあるまい。明徳館出身の篤学の士であったことは確かである。雲をつかむような神話の中の人物がハッキリとした人間像としてわれわれの前に現出したことを喜び、新しい資料の発見に期待したいと思うものである。

ちなみに広成の末娘孝子は本校一期生町田忠治の夫人である。

創立百周年の母校に集まる記念図書

百周年記念文庫は、本校創立百周年を意義あらしめるため、記念事業に合わせ、同窓各位から隠れた蔵書や、貴重書のご寄贈によって図書資料の蒐集を目標に企画されました。この発想は意外な反響を呼んで、すでに式典以前から申込みがあり、また、祝典にご参加の方々も、銘々りっぱな図書をご持参くださいました。

このようにして集まった寄贈図書は現在、記念文庫台帳に登録し、図書館の新しい書棚に納め、職員、生徒の閲覧に供している次第であります。

さて、「創立百周年記念事業報告書」（昭和四十九年五月発行）をご覧になられた各位は、すでにご承知と思いますが、その時点において寄贈者数は八十六名、図書数は六百四冊の多きに及んでいます。その後も続々と、同窓会員、職員、生徒、PTAなどからの寄贈もあって、記念文庫に対する理解が深まっていることが立証されました。本欄は、その状況を順を追ってご紹介するというわけです。つい先程も、神戸市にお住まいの病院長（明治44卒）であられる大先輩から、特別高額のご寄附を頂戴することになりました。

この吉報に対する驚きと感激を、直ちに学校長、関係職員に報告しましたが、このような篤志の方が居られることに誇りをおぼえ、心からなる感謝の意をこめ、同窓各位にもお伝えして喜びをわかち合いたいと思います。

創立百周年を迎え送って早や二年、〝記念文庫の窓口〟は開かれております。各位のご理解とご協力によって、ますます記念文庫の拡充をはかりたいと祈念している次第であります。

どうぞよろしくお願い申しあげます。

――【寄贈図書一覧】その一――

榎　恒吉（M35）○改造社版「現代日本文学全集」48巻。

田所哲太郎（M37）○小学館「日本百科大事典」14巻○広辞林はじめ主として辞書類（日本史・東洋史・西洋史・社会学・法律学・経済学・理化学・生物学・地理学・語学）とも28冊。

大貫吉之助（M41）◎亜麻の施肥理論と実際。

伊藤時助（M44）○田沢民話。

木田篤敬（M44）○明治大帝○杉浦重剛先生「倫理御進講草案」○二木博士講話集○義公生誕三百年記念会出版「大日本史」17巻○毎日新聞社「重要文化財」16巻○「国史大系」15巻○荻津謙治「サー・アイザック・ニュートン」並びに、進藤竹次郎「土竜独語」は本校卒関係の著書◎十九溪句集1２輯○講談社版「故宮博物院」（豪華本）

堀江富太郎（T3）○「ラインの河辺。」

川井忠臣（T3）○直江城守

小川定明（T6）○関東大震災写真画報㊥大正12・9・1

境田武太郎（T7）○現代代数学

渡辺不二男（T8）◎芹の花○道草人生○ささぎ

進藤錦一郎（T9）○図説「日本歴史」3巻

松本源太良（T11）秋田県歌人懇話会発行・年刊歌集○夏霧○晴野○遠望○あけくれ○万年草（昭和43年度から47年度まで5）○叢園社版「パパイヤット」

京野　赴（T11）○「海軍主計大尉小泉信吉」

金子恭三（T12）○Colliers Encyclopedia 24巻

小西達四郎（T12）○武塙三山を偲ぶ○早稲田大学八十年誌○世界を旅して

寺井和志蔵（T12）◎「自嘲の記」

藤田溪山（T12）◎「鳥の歌ふたたび」㊥前著は「鳥の歌」

佐藤達三郎（T12）◎癸亥誌

出原直助（T13）○三二書房「日本の名画」洋画1○○選○谷崎訳「源氏物語」13巻○「細雪」上下○中公版「日本の歴史」26巻○現代日本名画鑑賞○深田久弥「日本百名山」○小説東京帝国大学○真珠湾までの経緯○憲兵秘録○日本人とユダヤ人○日中復交○日・タイ四百年史○我が「足許提灯」の記○相馬大作と津軽頼母○日本捕虜志上・下○百山紀行○喫煙と健康○人間像修復とも百四十九冊

高橋鎌治郎（T15）○人間田中角栄○アメリカの資本主義○アメリカの外交政策

宮腰斌一（T15）○岩波茂雄伝

佐々木竹治（T15）◎随想「第三楽章」

【旧職員】

尾張誉吉　○太平記とも3冊

橋本興一　○上州の文学紀行

小林道一　○内藤湖南とも2冊

鉢村　要　○芥川竜之介全集8冊

武田喜代志　○石の文化・木の文化○国家と宗教○人類生態学ノート○ドラマとの対話とも6冊

横山　侑　○ソビエット短篇集

阿部正三　○「日本の国家建設」とも5冊

田口武祐　○洗心録

松山　忠　○OOENCYCLOPEDIA AMERICANA 30巻

渡部仁一　○The Sorter Oxford English Dictionary（2515～）

（凡例）
●略敬称
●（　）は卒業年次
●◎印は著書を示す
●今回はM・T卒と旧職員（以下次号）

随想

五十年の回顧

伊達義行（大7卒）

大正十一年といえば今から五十三年前になる。弱冠二十二歳の私は胸をふくらませて母校秋中に教師として赴任した。校舎は根小屋町で東に十七連隊があってラッパの音がやかましかった。

ちょうど創立五十年に当たり、文武共に大いに飛躍した年であった。剣道では小西達四郎、本庄谷慶次郎、佐宗金太郎、秋元伝らの豪の者がそろっていて、全県大会はもちろん、早大主催の全国大会等各種大会で優勝した。柔道は村井新平、小沢文一郎、田中一郎、寺井和志蔵、桑名弥四郎らの猛者ぞろいで、全国大会優勝の余勢を駆って、二高主催の関東東北中等学校柔道大会に出場した。

当時二高には加藤金治、柳谷清三郎、伊藤清などの先輩がいて牛耳っていた。

準決勝で仙台二中を降した秋田は、決勝で東京の荏原中と雌雄を決することになった。荏原中は大将三段山本武四郎、副将薄田二段という豪華なメンバーである。取組は進んで一対一の同点、規定により引分者の中から一人を出して代表決戦をやることになった。わが方からは寺井和志蔵、荏原は今野である。どちらも負けられぬ一戦、五十分余の死闘が続いた。勝敗ついに決せず、両校優勝となり優勝旗は半年ずつ確保することになった。

かくて次は全国優勝を目ざし、大正十五年、駒を東都に進めた。東高師主催の全国大会である。初参加で平安中学に敗れたが臥薪嘗胆三年、昭和四年には決勝まで進みながら松本二中に惜敗した。

明けて昭和五年、進藤末治、出原資郎、斎藤正作、武藤理一郎、鎌田民治郎の面々をそろえて五回目の出場である。決勝に残ったのは秋中と宿敵松本二中であった。試合は副将まで引分で大将戦となった。主将進藤は立ってよし寝てよしの名選手であった。熱戦数合の後、進藤は敵の主将を崩上四方固に抑込んで動かさず、奇麗に勝った。全国優勝ついに成る。監督の私は胴上げされていた。桐紋の優勝旗は東北の地に初めてもたらされ、秋田市のパレードでは市民の熱狂的な歓迎を受けた。

その後、間もなく満州事変が起り、世界大戦にまで発展して、諸種の大会も中絶せざるを得なくなった。

私は昭和十九年五月隣接の秋田鉱専に転じた。当時、秋中の校長は玉木正行氏、鉱専の校長は池田謙三博士であった。やがて新制大学が発足し、私は鉱山学部所属になったが、間もなく学芸学部（後の教育学部）に籍を転じて、昭和四十年に停年退官、勤続四十三年の幕を閉じた。

私どもの秋田中学卒業は大正十三年、今から実に五十二年前の昔である。

しかし、一番なつかしいのは当時の同級生であり、年が経つにつれて一層なつかしさがます許りである。毎年一度は、必ず同級会を開いているが、今では東京在住者の方が多くなったので、東京で同級会をやる回数がふえてきた。たいてい、新宿の小さな料理屋の二階で、十数人集って気炎をあげている。

幸い出版業をやっている吉成一郎君が、実によく世話をしてくれるので助かっている。

吉成君は、日本共産党の初期に左翼運動に身を投じ、戦時中巣鴨の刑務所に七、八年も拘留されているうち、一夜夢うつつの中に、人間には心霊の世界があることを忽然として悟り転向したという経歴の持主である。

われわれの仲間では、人間的に最もしっかりしている一人と尊敬しているが、玉に疵は片方の耳が聞こえない。留置場で鼓膜を破かれてしまったそうである。

そんなことで、吉成君にばかりお世話をかけて相すまないし、私が六度目の知事に当選させて頂いた機会に、秋田で同級会を開き、東京、大阪の諸君にも出席して頂こうと思い内藤庸男君と大野達郎君に相談した。両君も快く世話役を引き受けてくれ、七月十九、二十日に開催することになった。

運よくその日は快晴で、午後一時県庁に集会した。思いがけなく、卒業以来一度も会ったことのない大島金作君等も東京から参加し総勢二十九人となった。残念ながら、宇佐美重長君は静養中で参加できなかった。

昔の修学旅行のように大型バスに乗り、私は助手台でマイクを持ちガイドを勤めた。

ホテル帝水の一夜も楽しかった。湯上り、浴衣がけで酒を呑むほどに、半世紀の断絶は全く消え去り、昔の悪童に立ち返って騒然たる談論風発である。はじめは「知事さん」等といっていたが、もうサンもつけない、「おい小畑お前は」である。その呼びすてがいかにも自然で、ほんとうに気持がいい。

女房以外、一つの部屋に枕を並べて寝たのも何十年ぶりかである。吉成一郎、神田孝一、阿曾村千春の三君と一つの部屋に寝た。

神田、阿曾村両君が夜中の二時頃帰ってきて眠りをさまされたが、朝目をさましたら、阿曾村曰く「おい、神田と小畑、お前達のいびきがひどくて眠られなかったぞ」。

一日有半、言いたいだけのことを言いあって、実にサッパリした顔で皆解散して行った。

世に、同級生ぐらい有難いものはない。

世にありがたいもの

小畑勇二郎（大13卒）

土

木田篤敬（明44卒）

秋の土起して麦のうね作り
色鳥や背山は木の実豊なり
菊焚いて匂ふ焔に手をかざす
千本の大根漬けし母なりし
蓮根掘る泥沼泥舟泥男

「十九溪句集」より

◎お願い――（編集委）

「随想」の玉稿をお寄せください。次号は五月末発行の予定ですから五月上旬までにご送付願います。勝手ながら掲載順序等はお任せください。

軍友十四会、青葉城趾

泰堂　貝沼研造（昭8卒）

別離芒々。四十年
旧朋相会。古城辺
倶談。把臂。情無尽。
星上。秋風立。暮天。

わが故郷

阿部正路（昭25卒）

松の音響くふるさとの雪の中ああ人間の顔せり馬は
冬の園に常に水湧くひとところまたたきやまぬ星を映せり
夜の部屋に光り放てる鏡ありいくたび母の顔をうつせし
廃れたる市内電車の鉄路あり赤銹びて顕つ吾が少年期
灯る船見えて寂しき郊外の海の街つねに吾のふるさと

（歌集「飛び立つ鳥の季節に」より）

わが放浪

花岡泰雲（昭5卒）

父が癌で亡くなってから、私の放浪は始まった。

他人には、八十才近くまで生きた者の死は、それは寿命で、生きるだけ生きた、その果ではないかとも思われよう。

併し、親の苦労などを、つぶさに見て来た六十才近い当の子供には、この頃、小遣いをあげたり旅に伴していた親の死は、まるで子供を失ったように悲しく、親が哀れであった。その時から私の放浪が始まった。

とにかく駆けまわって、父の死の匂いのするところから遠ざかり、何か急ぎの用事でもあるようにあたふたと出て北海道を何日もかけて一人旅をした。その初夏が過ぎると、今度は京都を経て広島まで、一人で何日も、ものをいわない旅に出た。奇妙に空の低い感じの汚れた南の空気を車窓から眺めて物凄い郷愁にかられた。

その年の暮れ、私は南の方の山中に百坪の別荘分譲地をもとめて山小屋を建てた。秋田が息苦しくなるとそこに逃げ込んだ。特に冬の厳寒をのがれて誰もいないし毎日暖かな日の射す山中は、精神的にばかりでなく、肉体的にも私を益した。併し夏は、この南の方に至る道中の暑さに閉口した。上野駅、東京駅、熱海駅の人混みの中で、北国の太った足の弱い熊は、汗にまみれて口を開けて息をした。そこで一寸待って今度は、県内で、海岸の景色のよいところに夏用の家を造った。

飯は勿論、おかずも全部一切自分でする。同じおかずを三日も四日も食べなければならない日も続くこともある。何処でも人とのつき合は全くしない。海にも一人で入る。そして夏の海より知らない愚を気づく。春、秋、冬の海の表情は、夫々実に豊かで、冬の海の雪のない快晴の渚で、ウイスキーのコップを波にさらわれて見つからない日もあった。

南にも海にも家にもいない時は京都のホテルで寝ている日が多い。京都も見るところは見てしまった。女房や子供が、どうして、そんなに同じところに行くのかというが、この頃は知らぬところを放浪するのが、おっくうになってしまった。

併しこれではならぬと、来年は九州と四国を廻って見ようと考えている。何しろ一人旅なので、心ではマナスルに登るとか、南極探検みたいな大げさな心のときめきをおぼえている。

この放浪は自らの果てるまで続きそうである。

慶祝

◎春の叙勲（4・29）
古木隆蔵（大11）勲三等瑞宝章
児玉栄一郎（大4）勲四等旭日小綬章
蓼沼銀治郎（大8）勲五等双光旭日章
◎県教育功労者（11・1）
菊地俊一（前校長）
佐々木重光（前事務長）
◎秋の叙勲（11・3）
大淵仁右エ門（大12）勲三等旭日中綬章
渡辺時治（大14）勲五等双光旭日章
吉地　完（大11）勲五等瑞宝章
◎秋田市文化章（11・3）
近藤国一（昭4）（国語教育と児童文化の発展に寄与）
伊藤博次（昭12）（美術界の発展に尽力）
◎県の地方自治功労者（8・29）
西村節郎（大14）能代市長
小山田兵太郎（大14）雄勝町
◎秋田市の功労者（7・12）
相場圭太郎（昭3）市議
藤田溪山（大12）市公平委
川口弥之助（昭12）市農委
○佐藤育秀（昭6）藍綬褒章
○柿崎純一郎（昭2）黄綬褒章
○柳谷清三郎（大8）能代市名誉市民第一号（11・3）

哀悼

●小松秋明（明45）4・26　82歳
●加藤謙一（大7）5・23於京都
●池見元一（大6）6・3　76歳
●佐々木守三（昭6）8・23　61歳
●竹内圭三（大11）9・7　73歳
●竹島芳憲（昭37）9・7　32歳
●金沢雪澄（大3）10・12　82歳
●児玉栄一郎（大4）10・13　78歳

編集室

「同窓会だより」発刊に寄せて

百周年を過ぎ、母校も百一年を迎えました。同窓各位にはご健勝にてご活躍のことと存じます。

百周年の仕事をやって、一番感じたことは、同窓会の皆さんから年に二度でも良いから、母校の近況を知らせて欲しいものだとの声でした。今年九月十二日の理事会において「同窓会だより」の発刊を決議され、いよいよ発行のはこびとなりましたことは、ほんとうによろこばしいことと思います。

皆さんから面白く読んでいただける「同窓会だより」にしたいものと編集委員一同決意をかためておりますので、よろしくご協力を願いたいものと思います。

同窓各位のご自愛をお祈りいたします。

（委員長）

――○――○――

「同窓会だより」第一号をお届けいたします。題字は蓼沼会長にお願いいたしました。

会務報告

○2・5・役員（常任理事・年次代表者）会（ニュータケや）
○3・7・昭和49年度卒業式に引続き同窓会新入会員入会式（秋田高校講堂）
○4・7・新旧校長、事務局長歓送会（PTAと合同）（ニューグランドホテル）
○5・2・仁別学校林一部焼失
○5・10・学校林焼失部に植樹
○5・26・秋高艇庫落成式（向浜）
○6・26・昭和49年度同窓会会計監査（東洋軒）
○7・17・常任理事会（協働社大町ビル）
○8・16・昭和50年度定期総会（出席者約85名）（あきたくらぶ）
○9・12・役員（理事・年次代表）会「同窓会だより」発行を決議（秋高研修会館）
○10・6・「同窓会だより」編集打合会（鎌田会館）
○10・15・「同窓会だより」発行資金委員会（第一回）（ニューグランドホテル）
○10・29・「同窓会だより」発行資金委員会（第二回）（ニューグランドホテル）
○11・10・新役員による第一回役員会（菊地前校長に感謝状贈呈）（鎌田会館）

事務局だより

←お知らせ→

「同窓会員名簿」増刷について

百周年記念事業の一つとして発行された「名簿」は、お陰様で二五〇〇部全部さばけました。残部はないかとの声がありますので、増刷を考えております。ご希望の向きはご連絡ください。希望数がある程度まとまったら増刷に踏み切ることになりますので、なるべく早くご希望をお寄せください。

「秋高百年史」について

「百年史」は多くの読者に喜ばれました。この種の本の先鞭をつけたような形なので全国各地の高校から次々と注文が来ております。部数に多少の余裕がありますのでまだお求めでない方はどうかお申し込みください。

「秋高同窓会だより」発行予定

「同窓会だより」創刊については本号の「事務局だより」にあるように数回会合を重ねてその内容や発行資金、年間発行回数などについての話し合いが行なわれましたが、いずれも極めて積極的な意見が出て、やっと創刊に踏み切ることができた次第です。

発行回数も、いろいろ意見がありましたが、結局、年二回、大体五月末と十一月末ということになりました。ご協力ください。

秋田市手形字中台一
秋田県立秋田高等学校同窓会
電話（32）7200

編集委員会は次のような構成になっております。

○委員長　小西達四郎（大12）
委員　長野　佳司（昭29）
委員　小玉　康延（昭31）
委員　今田　猛（昭31）

それに母校勤務の同窓会員六名がいて、主として実際の紙面作製の実務に当たっています。

委員　一関　吉美（昭14）
委員　佐々木一郎（昭4）
委員　成田　朝春（昭18）
委員　小松　彰（昭19）
委員　山谷　浩二（昭20）
委員　槙村　久美（昭37）

なお、次の方々にはいろいろと指導、助言をいただいています。

顧問　大嶋　民治（昭8）
顧問　松本源太良（大11）

至らぬ点も多々あると存じますので、お気づきのことがございましたらご遠慮なくご教示くださるようお願いいたします。

秋田相互銀行
常務取締役　鎌田勝郎　S14卒
取締役　那波伊四郎　S2卒
取締役企画部長　榊　虔一　S19卒

秋田魁新報
取締役編集局長　鈴木哲郎　S13卒
取締役会長　人見誠治　T4卒
取締役経理局長　川村政夫　S20卒
取締役広告局長　阿部七郎　S14卒
取締役販売局長　高瀬政忠　S15卒
取締役工務局次長　神成正衛　S20卒

羽後銀行
取締役頭取　塩田雄次　S5卒
常務取締役　佐藤　彰　S19卒
取締役業務部長　千田達彦　S20卒